

• 0 1 2 3 4 5

JAPAN

Tama

通俗排悶錄

十二

卷之十一

錄

吳二 霽應逆子 高采者  
雷異 三条 博興女 陶琰  
俞保 神告記 周侍御  
謝在杭 義優 義允

~13  
3144  
12

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

雅

通俗排悶錄卷之十

靈異之部

目録

吳二

雷殛逆子

賣米者

雷異三條

博興女

陶琰保

3144  
12

神告記

周侍御

謝在杭

義優

虎

合十二種

通俗排悶錄卷之十一

靈異之部

吳二

全亭正直

校



吳二も母ふ事へて至孝あり。ゆる夜夢ふ神告ぐ曰汝夙業ふよ  
すく明日雷又遭く死まべ。吳二驚く母の巷たゞを以て。救ひせし玉い  
えんるを歎けとぶ神の口命を天又受逃るべくとぞ去玉ア。吳二  
母の驚くれど心き早朝又母ふ向て云々。児他所ふ往んとも。母親  
暫妹の家ふ往くわなせと云々と母許さモ。然るふ黒雲俄か起  
雷聲おやくと鳴出一ぬ。吳二母をして戸と閉させ。自田づくふ出く  
罪を待。時ふ雲霽ヨリうけ出。急帰て母ふ見えり。尚驚いた愁ん

寔を知り。其のを告げたり。其夜夢神來曰。汝が至孝  
天と感せし。已て夙惡赦玉アリと告玉ひりと。

雷殛逆子

常熟地の西北の地ふ逆子某と云者。康熙元年五月廿三日田ふ在て  
農業を成居。母向ふ女の家ふ住くゆり。此日偶子の家ふ来  
けし。媳迎て甚喜び。飯を煮火く歎く留く姑が歸る時ふ臨く。  
米數升を送く速く歸玉へよ。夫ふ怒玉かと云く別居。母家  
を離く際ふ子と往遇ふ。子大ふ怒。母のむる米を指く。盜たうと  
云。母米を途ふ置くれば。子竟又携く帰とく。尚口を留す罵で往く。  
からむ雷声大ふ震ふ。此子大ふ駭く妻は大缸をりく我を蓋へと

云ふ妻從ひぞ。其身もはゆ雷と擊き死。

賣米者

清朝順治年の間。福州饑饉の時。書錦坊名ふ米を賣者ゆ。雷  
鳴く二人を擊死せり。其戸とある二字と書く。其文字のま。

火中月水厓中木査

やや。りある文字と云ふを哉る者。人之を萬壽塔の壁  
題し置く。夜蜘蛛ゆく。絲を字の中ス無く。直く貧て下がる。  
之を視。采中用水康中用木査。深水と木査と交え賣し。と云  
文字とぞありふ。其人の平日を詢。果してさる者とぞ。

## 雷異

新州の楊姫もかゝり寡とあり。一の孤を鞠そぞくたり。年三十  
歳成らざり。ひまごと妻を娶らば。姫夫の祀の絶ん更と恨て。さあぐ  
とく娘を取んと嫁へどと聘よ遣だ金ざる無け。私が富家よたゞり春  
はた賃と取く漸く聘金とあらへ。始く子の為よ婦と娶りけり。  
あと其自死を富家の家有て役を成して居や。婦門ふのる夜姑  
と索まども見えざり。婚姻の禮を成させ。夫其故を語りまべ歸泣て曰。  
妾橐中ふ金なり。姑を贖べと云。夫夜富家又馳て往る。金を持  
きまく出なればがく歸來く金を索む。婦已く金を汝よ付せりと云。  
夫大ふ愕むまく言良ありた。總く貧家の壁も皆革より編ひ

を鄰人竊ふ其語をやう。無く詠て夫のまく。金を取くまく  
なうりけ。婦給まくろを羞。且此外又金無け。姑を贖へてふく  
無賣を痛く。遂ふ縊て死た。時ふ雷あり。金と盜ゆる者を戸外の擊  
殺し。金をあおあく死をうた。孝婦ひ氣絶ひ復甦たとぞ。

興国州比丘尼あり。山中の池又浴居庵ふ惡少寄く脱な衣  
を取く匿し。尼裸あま上る。成ざく。唯ぬま居たるふ一の帰事そ  
水を汲み。之と互に僧あり。とゆひて走て逃げ。尼呼く救てたべと  
云ふ。婦尼ちるるを知り。我衣を脱く尼ふ着せ。日暮近けまで已が宿へ  
誘ひ一夜留く帰し。婦の夫も此日法外ふ在く。歸來たる。漸言細き  
児の父也向く。時僧の此よ宿アリと告。夫坐く。姫夫を引入きと疑て

怒く婦と杖つ婦の日彼も尼あり某の日を期して來んとく  
りまど衣を詰ふ歸させし候く其實を知り玉へと云う。杖尼も婦を  
徳よく期日ふ彼衣を洗く謝を述く帰まべーとあらマーケミド。  
とくとく期せし日み往ざりけり。婦も尼も亦ト初が夫も言ひた詞無  
し。遂に縊て死たり。後の日尼来て途ふ在り。時或言く曰。彼婦死  
せむ。汝往夏あまと云へば尼が曰。彼我るふよりと死せり。我往おれ婦  
の寛明らむる能ハドと云ふ。其家ふ至り婦の尸ふ取法をく哭  
くるが如く婦の側ふ同く縊く死スラリ。其夫帰く悔く曰。あふとその  
疑を以て二命を殺せらるゾと云ふ。自害して死スラセタリ。然も夫  
初々衣を盗む者も誰もを知りけり。此日雷一ヶ年を擊死せし。

跪く尼の衣を俸て死してめり觀る者恐きざるかうけり。  
豊城名地不孝子某と云者ゆ。常ふ其母ふほらく當受け。母  
江の側ゆ衣を構と見三才あり孫不意よ背よ肩きかうる。杵を  
揚とく誤く兒の頭を打て死し。母大ふ惶惧と里の家ふ逃く。往  
多と不孝子大ふ怒く日母吾子を殺せり吾母とせドとく。短刀と袖  
みづく空樹の腹中よ藏め置往く言ふく母とまく。引契て帰る  
道すく樹の下よ至る。樹の中よ刀を抽んと手をさへ入る。樹傍て  
其手と動くもの能ハゼ。杖半日たとう。雷大ふ發。忽不孝子を  
撃死し。此三條皆康熙八年己巳の夏の事あり。

博興女



博興もくこう 地じ の 民みん は 王兵おうへい か。女笄めい まつみ乃のひぬ。勢豪せいごう の 何某なにめい 其女そのめい を 窺見うきみ  
て一日いちじつ 女めい の ゆきゆき を 待まつ つゝ。掠くわ て 丟なげ て あらわしあらわし を 無む あり けり。家いえ は 連つづ く 徒と く  
ああ 已い が まつみ 为ため ん と すと 井い 女めい 位い 賜ま て 拒こ そ 促つく つ 痴ち の 痴ち。之の を 縊よ て 教たの い 戸と は  
石いし と 軟なん 繫つ つゝ。門かど 外ほか あつ 通とお た 深ふか て 沈ふか め て あ。王氏おうし 女めい の ええ さり け まを。  
所ところ 々ご 看み け まま とも 駭おど れ す。計あらざ の 施あた せ た 方ほう 也や 無む え き。一 日いつ 天あま か だ て て 両りょう 降お き。天あま か だ て て 両りょう 降お き。  
て。雷電らいでん 其家そのいえ を 遠とお す。靈壁れいへき 靈歷れいりき 大おほ く 作つく て 龕下たんげ す。主お 人の 首くび を 撤おろ す。  
さ。天あま 晴はる て 月つき ま だ 端は 中なか す。女めい の 戸と 併あわ し 出だ す。片かた み す 人の 頭かぶ を 捉つか す。と。  
審しん ひ 視し ま す。豪ごう が 首くび あ たり す。官くわん 之の を 使つか せ玉たま ひ 其家人そにじん を 責せ ひ と。玉たま ひ  
け ま。女めい を 取と え し ま す。委ま す 申ま す。寵ぢやう ひ 真ま 女めい の 化か す。所ところ あ る。天あま 乃の ま す。遣や ま す。者もの あ ら う。奇き と 云い べ 。

陶琰

向々多ふ僧已ひふ帰まりと給きく帰り。家人皆の手すり尋覓をぐも。  
跡も見えぬせんまぐ無臥る。其夜の夢ふ神。陶が在る所を示す。玉ひ。  
早く救あべーとゆ。僕之を信せざりけと共。復の夜も同夢をぐり。  
衆を集て鐘を舉て見けどが陶恙無くと在す。隠も一時より三日か  
成ぬ。之を官ふ訴けどが僧も眾せずとみたり。陶琰も成化年辛丑の  
進士となり。浙<sup>せき</sup>藩<sup>ばん</sup>浙<sup>せき</sup>州のを歴<sup>へ</sup>て南大司馬官ふ轉<sup>てん</sup>し。後仕を致<sup>め</sup>り卒<sup>まつ</sup>  
少傳<sup>さうづな</sup>官<sup>くわん</sup>を送<sup>ゆ</sup>。恭<sup>きょう</sup>人<sup>じん</sup>と謚<sup>あざむ</sup>せしと一人あり。

俞保

萬歴年号の間解州み俞保と云者。騰越の地み戌卒既みより  
亥。妻の王氏粒米を信香と作し。日夜懸み關聖祠ありの祠也。

信一香 一粒一米

一香 一點一淚

客一路 萬重山

流恨入蘭關

神告記

康熙十六年三月。安西名地。名の賣人魏丙と云者。上海名の市で布を買て夜旅店に宿す。醉て臥す。此夜風雨甚かり。金庫の藏金三百兩を失ひ。店主主人俞甲も。昨日橐金と買つる布の數を改めさせり。用ト夏むく。昨夜近郷へ出往ぬ。其弟愈乙と云者。留主を守てぞ在る。此又於そ官の訟たる。捕人来て賊のひる所を聽む。入る穴も刃えざと共。出る穴門う。道一と見えなま。外より入一賊をす。どく俞乙が疑ひ。前乙せんせんあくて梁の樹す。經き舌をかく。苦なるを人々

救て甦る。夏を浴す。上海の鈴任君と云ふ人。賢くよく獄を断玉ひたり。此人を度み居て鞠一王のみ一人を縊たるを救て息をぐさ。病人ゆく。竹輿のまゝ昇入つ。刑と施一拷問すべし者非矣。賣人へ有限の金を失く。哀號がり。餓る猿の如し。鈴任は。聞ゆ。此二人乃者生死計難し。然るふ拷問して肌膚を断。骨肉を折ても白状を乞ひ。乞ひ共。然も共今推て之を求めん。損へ所甚多く。萬一其實をほんを。自今以往罪あへて害を受る者。此二人ふ止まつてこそ。忍ひやまらぬ。久く。先命とく昇せさせ遣り。令其うち城隍廟ふ詣て神か禱也。寔を告させ玉ひねと請く。召され。捕人と留く。神の命を伏受けとも。寝宮ふ留く。歸玉ひ。寝宮も神殿の後のみ在り。唯

幔 檀 施 巾 盆 屏 几 の 類 と 罷 列 ま る。生 る 人 の 如 く して 座 位 を  
虚 せ り。時 ふ 十 九 日 あり。捕 人 寝 宮 の 下 ふ 伏 て 夢 公 地 ふ 肩 ひ な る。此  
座 位 の 上 ふ 神 の 至 や。唐 王 か う べ ー と ひ そ く 待 け と す。神 至 ら ぞ。暫  
わ づ く 女 の 童 の 出 て 呼 て 曰。神 已 み 縣 ふ 詣 て 玉 へ 里。衣 を 留 て 汝 ふ 賜 て と  
云 つ。右 手 ふ 初 き 女 子 を 抱 き あ ぐ。左 手 み か 衣 を あ づ く 兼 へ 里。取 て 視 て  
裙 褶 う さ と 夢 え ら。捕 人 役 て 令 す 告 な ふ。令 も 入 此 夜 夢 た な く ま。神  
嘆 頭 俳 衣 を 着 て 腕 と こ ま う。已 は 賊 を 得 て ま ど。君 ひ ま ど 知 と ま や  
と の 王 え。前 ふ 捕 人 ふ 告 く 神 の 縣 ふ 至 や。玉 ア と あ り し。令 の 夢 中 か 神  
の 至 り 王 ア と 云 う あ ぐ。夜 明 て 賈 人 令 の 庭 ふ 至 り て 申 も。昨 夜 賊  
金 百 両 を 旅 舎 の 内 ふ 投 入 つ と 訟 え。令 扱 と 愈 ひ う 賤 を 怖 ま く。姑 金 を

還 つ ま う ん 共 疑 ひ け と ど。捕 人 の 語 と 以 て 首 を 俯 し。再 四 考 て 曰。  
衣 を 賜 と 云 て 裙 褶 を 與 り。裙 褶 を 衣 ふ 非 ざ る。衣 ふ 非 ざ る 裴 の 家 す。  
若 裴 姓 の 人 の 此 が 近 鄰 す 在 や や。捕 人 叩 頭 して 曰。問 の 左 ふ 裴 愛 と  
云 者 侯 ひ な 無 慶 か て く 家 産 と 事 と せ す。其 者 旅 舎 の 傷 す 在 て。常  
ふ 旅 舎 も せ 入 ひ ま む 者 あり。此 裴 姓 ゆ く 侯 べ ー と 云 て 令 曰。然 う らん。  
夢 中 ふ 少 女 を 抱 き と 云 か。少 女 を 愛 女 す。五 口 聞 納 音 の 數 陽 姓  
左 ふ 従 す。今 非 衣 を 左 す。愛 女 を 右 ふ せ す。裴 愛 ひ う う 灵 無 し。  
然 と 共 吾 恨 ハ 私 の 縱 を 以 て。人 を 聚 み 入 ま し て と 云 て。之 を 踪 踪 す と  
之 を 實 を 得 ひ う う 無 し。又 捕 人 は 希 じ て 神 宮 ふ 侯 し い ま だ。捕 人 復 落 す  
寝 宮 の 下 ふ 伏 し ま ふ。一 使 也 く 呼 て 曰。神 至 ま う と。扱 其 虚 位 の 虚 位 す

主 王のと。裏 復入玉室。前の婦又出。敗走る。禪を持出。捕人又與へ米筐を以て少僕とく。老僕も隨て太らむ。捕人夢又月ノ所と以て令は告ぐ。令曰。禪と與ひて果しく衣又非ざ爾也。敗走る已露る。米も八十八あり。禮より出是を老者之が先立。今少者繼で出る。又賊敗きて。金八十八両を續出もあらず。而斐と收て之を拷問し。白状して曰。風雨の夜先旅店に入りて。匿き。金を盜み。十九日未至く夢み神勅わづ。金を還す。とゆふ依て。金百両を其舎又投入。今八十八両を辯中も置す。辯と皆家ふ在と云ふ。乞みより半を搜し。金をぬり。收緝状を定め。金の全うとざるを取た。任君其性正直。とく神慮か食。

之を薦る。誠有て。生と好の徳を以て鬼神を感せし。説く。神々求ゆ。其名を得。其裁断の明哲。周官の掌夢の秘と得。周禮の書中云る掌夢。学問の功ゆも寄る。天性清潔。而て嗜慾の私事とゆ。故に。神の其智を啓く事斯の如。初て官ふ盜む時七月二十五日。かず二日を過。民家不火を失。大風大起。燐る事。箕を揚る。如。任君竊ふ。我此所。令と成て。初め。斯も。蓄有。我不德。ありと。徒步。往。往て火の所を拜し。泥の為。又衣と汚して。ゆりけ。風止。火忽消。是神の感する所を知。任君名も辰。字も待庵。蕭山の人なり。丁未の年の進士也。

## 周侍御

明の天啓年とねんの時。御史周公宗建と云人。屢々魏閻明の代のちうとく惡人あくじんを誅せんと。上疏あがれて申一まうるふ依よ。其職そのむらくを奪うしなひを審かんめ。声こゑと聲こゑと喧けんとゆき能のへばは至いたり。許頭純さきとうじゅんと云者。公おふ向むかて声こゑを厲ひどして。因いな今いまの時とき不當ふとうてふとう魏さき上公じょうこうと署のす。二に丁とうと識しのらざる愚人ぐじんかかと云。公竟いよいよ獄ごく中なかへと斃ひそぬ。公六月獄ごくみ沈しづ。七月戸と戻もどす。家中うちやうの者ものの死死せるをを響ひびかか。時とき清江浦きよこう名な舟子ふねこゆ。一人ひとりの常つねある人ひと來くわて舟ふねを雇おふ。舟子ふねこ其その人の姓氏せいしを問たず。何なんきの所ところから來くわ玉たま。あふことことへた。其その人の曰い。我わも周季しゅうき侯こうか。京師きょうしより來くわつと云。舟子ふねこ曰い。吳中ごうちゅう吳國ごこくの諸公しょくこうの追捕ついぼうせられ。一いも有あと承うける。いんと問たず。輒ちよ蹙蹙しよしよて皆死死せりとと云。又魏監わいげんひのふと問たず。彼かれが罪惡ざいお貫ぬき盈あふせせ。久ひーかかぞぞて藏くわせくわとと云。叔舟おとねふね。

と漕とよく吳江ごこうに至いたり。其その人ひと門もんへ入いり。紫し。舟子ふねこを呼よき。家人けんじん出來あらて其その故ゆゑと問たず。季侯きこうも吾われ王おう人じんあり。召めしままし。京きょうに在あ。何なんぞ歸か玉たまへ。竟いたとと喧けん。争あい争あい。夫人ふじん急いそひ。日良ひよか是これ更うつあり。昨夢よみゆめ。小侍くわい御ごの家いえを還もどり。玉たまひ。脩けいひ死死せる。且よのよまひける。上じょう帝てい我忠がちゆうを鑒かが玉たまひ。直ただの神かみと為な玉たまひ。吳郡ごきゅうの舟子ふねこ。一い金きんを與よへん。を許ゆせり。我わ為な之のを酬こしせよ。信しんを失うしなひ。きとと云。金きんを與よへ。之のを與よへ。家いえ内の者もの舉あて哭こぬ。舟子ふねこも亦哭こて。因いな吾忠臣ごちゆうしんの魂たまと舟ふねを載のる。一生いっせいの奇き事じか。争あ此この金きんを受うけだだとと云。夫人ふじんの旨し。舟子ふねこ。背せき立たて。舟ふね人じん拜まつ。平ひら生せい。舟ふね人じんか。性たごり。大おほせり。汝な受うけざざ。其その船ふねを背せき立たて。舟ふね人じん拜まつ。一いく金きんを受うけて去くわけ。



## 謝在杭

謝在杭肇淵も聞困の長樂地の人あり。少き時邑の黃氏が園を書と讀む。此園久く怪物多しく居者無うりけを。謝在杭之を信せ。或夜燈下ニ坐一居るふ忽一の女子前来て拜々泣たり。謝在杭を叱れば女子曰。妾冤を負事久し。公は求て之を申んと。懸念非妾も湖州德清名の人なり。幼して父は隨て此の客と成る時同行の者み某甲と云者中表戚ありしが。父の囊橐と利と遂に父を教せり。妾が官司より訴へん更と恐れ。併て共々殺し。今數年を経ぬ。公他日必湖又官なる。望る甲を執て罪と行ひ。妾父子が死せると我家み告遣玉の父子死々悲無うりんと云てあぐと泣く。謝

在杭之を許諾し。復契を崇まること戒む。是より竟々怪めらる。其年謝在杭鄉試中也。果して湖州の推官名鑑。任より抵て即甲を捕へ。すまづび訊て立どろふ罪を伏し。遂に刑せよと。郡人之と神かと稱へる。

## 義優

義優も姓名を知らず。明の萬曆年の間吳門名士在て演劇をせり。諸伶相謂て曰。傳てく實を某の家と樓ゆ。宿する者多く忽死すと聞く。今夜彼處と往て能宿する者わざ。酒を以て賞賈まべと云ふ。大淨亟と我往べと云ふ。已つて又寢じて往くと云ふ。小生副未も我往て見んあど云へ。思ひて見も往復を止め。大淨曰。

然くを二人同く行か可あらんやと云ふ。衆人見そりゆ可らん  
とく勧め遣る。大淨を關公と教し。小生を關平と教し。副末を周  
倉と教し。大紅東と云謠物を唱へて徃。魏人此を教と云ふ。崇再  
生の非と云。三人樓上に元坐して居る。紅硬の比樓の下に哀げ  
む声にて哭声。哭声止ぬとゆふ。魚と樓の階子と登る。  
ぞ来る。足と首無毛屍の両手とく其顱と犁た。前來く  
拜一跪ぬ小生副末心懐てせんすゞと知らず。大淨獨喝して汝何  
よりある若ぞと云へ。寃鬼あり。元来江西饒州府の德安縣の  
人也。羅俊名と云者あり。三十六年以前米三百五十石と楓橋ある  
吳觀海人と云ふ賣て銀五百両を取る所。觀海我と教候ぬと云。大淨云。

汝の寃理ゆ。然と共何よ依て其實を知らんと云ふ。觀海が家  
人吳富揚と云ふ者二人助けて我を殺し。屍を梯下に瘞め。大石  
と用て横さまみ覆ふ。大聖詣憐て推計玉へ。大淨云。汝既み寃を負  
然るふ他人の祟ると成す。いふと向ふを曰葉。我枉死を人よ若んと  
主と共意ひ。汝は皆人怖もく自死せり。我罪非ず。大淨云。彼を  
法と實あを汝が寃を雪つ。汝姑怒と息て待べ。慎て形を頭  
とく人を害し。天紀を干す。あまと云ふ。命の如くまづと云ふ。  
さう。汝が大淨二人を戒て曰。此う。倘汝を必屍を毀て跡無くや成さん。  
然るべ此鬼と約せるふ負えと云ふ。翼日衆優酒を買て三人飲ま。  
夜中の事と云ふ。唯鬼の泣声のこゝと合て其子細を言ひ。其

より程あく大巡初てサ蘇め位玉る。撫君宴を邑公祠み設け候。  
大巡も妻（まご）を使（し）漢州へ入（い）ゆうて所の奉（ぶ）公（こう）の弛走（はしゆう）する。是時（そのとき）大淨其席（せき）在（いた）る。撫君と可（こ）む奉（ぶ）公（こう）を。時（そのとき）大淨其席（せき）在（いた）る。忽指を嗜（く）て血（け）と面（おもて）を行（は）て。まくと席上（せきじょう）に起（あ）て。よりまくのからす  
くる様（さま）して。二公（ふたうわ）に向（むか）て語（かた）て曰（い）。本郡（ほんぐん）ニ寃（えん）ゆく死（死）せる者（もの）あり。天（あま）よ  
安（やす）ゆ。此關某（このせきごく）開羽（あらは）の靈（れい）天（あま）勅（てき）と受（うけ）て。二大人（ふたおとこ）をまく寃（えん）と  
雪（ゆき）しやんとすと云（い）。二公（ふたうわ）大（だい）に愕（おどろ）て謹（つつま）で教（おとす）と受（うけ）んと云（い）。大淨曰（い）。事（こと）洩（あ）さんと  
恐（おそ）る。いふせんと云（い）。二公（ふたうわ）大巡と撫君とそとすまゆりをきそ。大淨鬼（き）の告  
げをすと盡語（ことごとくごく）す。舌を嚼（く）て鮮血（せんけつ）を嘔（ぬぐ）。暈暈（まくまく）きくるありとしく  
仆（ひし）たまふ。扶出（たてしゆつ）して後漸（ごせん）く甦（よみが）。二公（ふたうわ）蜜（みつ）町社（まちしゃ）三百人（さんびゃくじん）と遣（し）。觀海（くわい）  
家（いえ）と園（えん）を。并（とも）に富楊（ふよう）三（さん）を擒（とら）て。一（いっ）び訊（き）玉ひなれば。皆有（ある）一（いっ）を

自状す。叔屍（おとし）と發て出（で）を奪（だつ）。銀も數の如くとあるとて庫（くら）の貯  
ふ。三人の者皆辜（く）の伏（ふ）。郡中名（めい）て二公（ふたうわ）と稱す。神の如く  
大淨終（のう）の語を洩（あ）さして。鬼の冤（えん）と雪（ゆき）ゆる。眞（まこと）ふ智勇（ちゆう）の人  
と云（い）。

### 義虎

荆溪（けいせき）ふ二人の友あり。其うちふ及て一人を富人（ふじん）と  
貪（ね）うき。貧人（ひんじん）も彼の財無く。唯書數（かず）を知るのみ。妻も貌  
羨（うらやま）うけ。富人謀（ぼうじんめう）と設て貧人（ひんじん）に向て云。汝（なま）が貪斯（ねい  
す）と。富人（ふじん）を圖（あらざ）。貧人（ひんじん）圖（あらざ）。富人（ふじん）無（な）いと云（い）。富人（ふじん）  
山（さん）に住（す）る某甲（ごくわ）ある人財豊（とよ）ある。主計吏（しゅけいり）よそと見（み）る久（ひ）。

汝が才此よ應せり。汝可と云々我為よ之と策らんと云ふ貧人辱し  
と謝しけど。富人即舟と具へ婦を載せて往ぬさて某の山の  
下の舟着けとて富田人云我汝が事どひまご某ふ語もぞ。然るべ夫婦  
はまごち性あを被ぐる忤りやわらん一び忤り復進む極うとす。  
汝が内を舟又留め置て吾と汝と先徳て計ふべと云けまが貧人  
之の徳ひそく偕々山に登り徳く。富人むらうげき路と回りく。引く  
險へた溪林の中を徳く。貧人船舷破れて血踵より流る。極やる寂  
き所ふ至りて。一足ふ貧人と蹴仆して腰き。鉄をかへて所つら。松  
息絶ぬと思て死と返して山を下ざり。舟ふ至て婦又向て汝が夫井を  
山中ゆく虎又噛生まぬ之どりふせんと云ふ。婦大よ驚て泣く。富人

今も歎く共かのあ。吾試み汝と同く徳て屍とふん。其上ゆく兎も  
角も計へべと云ふ。婦之の徳て偕々山に上るふ。富人引徳て別の  
險惡す溪林の中の寂へ死處ふ至て抱きまく之と淫せんとす。婦  
ひまき答もやうふをうく。忽林中より虎躍出。大ふ哮て前ま来て。富  
じを噛く。矢出しき。矢く之を噛殺して。婦驚きのそれ。一  
矢を定め。彼山中の路を知りあぐら斯らめを。我夫果して虎の腹  
中に入りうちと。ウロコと轉じて山を下らんとする。路邪ま  
て徳迷ひく。哭きたゞり。處ふ人の走事も。いづか女の斯る山ゆく在ると  
向ふ。婦委く其由を陳けと。其人曰汝哭く。更あれ。汝と送て舟を  
處ふやうんと云て。先よまく。尊徳て。彼ふ汝が舟ゆくと教て。勿心然

とくと消失たり。此神の助玉へるあべ。婦舟が登けとひもひの共  
為め方無く。忙然として居たふ山中より人の哭つある若ゆす。  
遙かに夫が似う。婦娘ひ異て居たふ夫も亦思たる。我婦賊が奴  
らをうべ。何ぞ獨舟が在るやと疑て。相近はなく月夜を帰す。相携  
て大い勧て各其さまを語る。夫が曰。彼汝を活せんとして未だ  
殺さんとして我死せよ。我怨むべき所無一と云ふ。婦が曰。吾君死せうと  
名ひつぶ死ふ玉へす。賊が報へんとする自報を成し。我も亦憾むが足  
事無くと云て。夫婦悲々と慰み。又哭く笑ひ。諸共が其家の帰ふ  
はま。

六樹園翁譯

東都 溪齋英泉畫

紫嶺齋仙橋淨書

文政十二年己丑孟春發販



三都 京三条寺町 山城屋佐兵衛  
大坂心齋稿筋博齋 河内屋茂兵衛  
江戸鞠町通四丁目 角丸屋甚 助  
同所平川町二丁目 前川忠右衛門  
同京橋南傳馬町三丁目 三輪里幸 藏

書肆

通俗排闇錄卷之二大尾

